
essais ころみ 2018年5月

2018年5月1日（火） 晴 今日もからっと晴れて、大型連休前半はよい天気だった。でも明日から明後日にかけて荒れるらしい。その後は一気にまた寒くなるのだとか。そうこうして、5日は立夏

- 繋ぐもの, 繋ぐもの ① - 絶妙の出会い

読書のよいところの一つは、身近すぎて普通はあまり深く考えなくなっていることを考えさせてくれること。「時間」について、先日読んだ本の冒頭、次のように書いてあった。

「時間が流れているからものが動くのではなく、ものが動くから時間を認識できる」（『時間とはなんだろう ～最新物理学で探る「時」の正体』（松浦壮 講談社ブルーバックス 2017年9月）

最終的にはまだはっきりと時間とはコレだ！を言えないよう。「時間」とは何かと問うことは、宇宙は何かを問うことと同じだそう、でも結びの次の一節はよい示唆を与えてくれる。

「時間は、時空、重力、量子場に刻まれた建造物を絶妙に繋ぐ要石」

今から20年ぐらいに思ったことがある。人の出会いとは、個々人が生まれて流れ始めた時間の道すじがあって、それが交差した時のことではないかと。

でもあらためて考えてみると、そう思った時に頭の中のイメージは人が移動している姿に焦点があたっている。時間の道すじというよりも、空間移動の道すじ。

それが予め決まっているかどうかはさておき、誰しも決定的で、絶妙な出会いの一つ、二つはある。その意義は計り知れない。

2018年5月8日（木） ついでがあって、市立美術館の『江戸の戯画』展に立ち寄る。地下鉄車内の広告を見た時から気にはなっていた。行った人から「よかったですよ」と聞いて、足をのばすことに。

どれも見ごたえのある作品ばかりだった。庶民の生活、猥雑、風刺、など等、いつの時代も庶民はたくましい。作品を観ながら、李朝時代の絵師キム・ホンドの作品を思い出した。

ところで、作品は書物になったものが多い。だからショーケースの中をのぞきこむことになる。壁面展示なら、遠くからでも眺められるが、そうもいかないの、列に沿うか、列のとぎれるのを待つことになる。部屋ごとのスタッフがさかんに、「順番ではなく、どうぞ空いたところからご自由にご覧ください」。



周辺の猥雑さとは一線と画す茶臼山。長い歴史の地霊ただよう空間。



2018年5月9日（水）徐々に晴：一昨日はよく降った。昨日もまた雨が降った。気温は4月上旬なみ。ただし週末から週明けにかけて、ぐんぐんと上がるらしい。日の出の時間も4時台になった。

- 継ぐもの、繋ぐもの ② - 大人の役割

『君、それは質問ではなく、詰問だ』

門下生たちのミーティングを側で聞いていた塾長が一人に注意した。その様子を少し離れたところでみていた10代のわたしは、「詰問」という言葉を初めて聞いた。

質問をたたみかけて、相手は返答する間もない。正義感が相手をなじる道具になっている。“それはそうかもしれないけど、そんな言い方しなくても…”という感覚が、「詰問」の一言で言い当てられた。大人の世界を見たような感じがした。

もしこの塾長のところへ通っていなかったとしたら、どうだったろう。今とは違う感じの大人になっていたのではないか。根は同じだから、大きくは変わらなかったとも思うけど、相当に変わっていた可能性もある。

何より尊敬する人間の基本モデルは違ったのではないか。「堀田善衛」を知ったのはこの塾の読書会だったから、あらためて考えてみると、その後の人生の選択自体に、微妙に、あるいは、決定的に影響していたのかもしれない。

ずいぶん大人になってから、ある人の言ったことが印象に残っている。『若い頃にどういう大人に出会うかによって、その人の思想の世界が決まる』。すべてがそうではないけど、いずれにせよ、大人の役割、責任は大きい。

さて、そこで考えてみよう。今の世の中で、ごくごく一般の生活者、一社会人として、大人が努めることは何か。

2018年5月14日（月） 雨あがり、晴

日曜の昨日、朝からずっと雨だった。よく降った。そのおかげで、空気があらわれた。薫風五月の日差しがキラキラしている。少しひんやりして、この季節ならではの一日。まもなく梅雨だと思おうと5月中のお天気、時間を大事に使いたい。

- 継ぐもの、繋ぐもの ③ - 厚意的暗躍

大人になって気づくことの一つに若い頃の稚拙さがある。誰でも大なり小なり、そうなのではないか。社会のことも、人間のことも、まだ何もわかっていないのに、わかった風に言う、振る舞う。

そういう若い者たちに、いずれわかる時がくると、根気よく、あるいは達観して、注意、忠告、助言、苦言を呈する大人たち。そんな大人たちがいてくれてよかった。合わせだったと今あらためて感謝する。

特に本人の知らないところで、厚意的に＜暗躍＞する大人たちの存在。本人の才能をのばし、活躍の機会をつくる。少々の労力と時間なら気にせず、若い者のためにひと肌ぬぐ。そういう大人たちがいた。

もちろん今もいるけど、『社会の構造が変われば人の意識が変わる。人の意識が変われば行動が変わる』。相手のためになると思って言ったこと、やったことが相手の反感を買い、場合によっては「ハラスメント」扱いになるケースも今は珍しくない話。

相手が子どもでも大人でも、気づいたことも、あえて言わない。それにこしたことはないと考えても今はやむをない世相。

ところで相手について気づくということは相手に関心をもっていているという証。相手に関心をもってないと、相手に何がよくて何がよくないかの発想は出てこない。昔から『言われるうちが花』とはよく言ったもの。

こういうことをつらつら考える一般人は多くないかもしれない。幸か不幸か考えるタチであり、身近かな大人たちから受け継いだものだと思う。考えて、自身に問うて課すことを、この機会に確認しておこう。

2018年5月17日（木）

本町へ出かけたついでに東洋陶磁美術館へ寄った。この春の特別展はフランスの陶磁。季節のよいうちに行っておこうと思って。でもこの日は季節外れの蒸し暑さ。堺筋本町から中之島まで歩いているうちに疲れてしまった。

展示は見ごたえあるものだった。でも、ゆっくり観る気が失せた。というのも、作品の一点一点をスマホで撮る人あり。入館が同じタイミングだったのがネック。

先回りしたり、後に戻ったり。フラッシュなしなら撮影がOKとしても、カシャッカシャツという音が耳にさわる。アートな空間、雰囲気損なう。

そんなに撮ってどうするのだろう。自分の何か作品のヒントにするためかしら。概観からそんな感じもした。

読書にしても、鑑賞にしても、そういったものから自分の創造性を育むことになるが、作品のパーツがそうするのではなく、作品のもつ空気感、姿勢、精神といったようなものが自分の中にしみ込んでいくからだと思う。

読んだ本のどれも内容はほとんど憶えていなくても、読んだ良きと感じたこと考えてことが、どこか頭の隅、体の感覚に納まっている。その積み重ねがその人なりの視点や考え方、価値観につながっていくのだろうと思う。

だから、そういう時間をもつこと。それが大事だと思っているから、時々、本を読み、アートに接する。



2018年5月20日（日）

松原市のしばがき神社で「coicoi」。商工会議所の昨年2017年度の受講者有志が企画し実現させたマルシェ&婚活イベント。驚いたのは婚活の応募者が定員オーバーし、早々に募集を締め切ったとのこと。この秋には第2弾をやろうという話も出ているとか。



2018年5月21日（月）小満 晴れ

先週中盤は梅雨の走りのようなお天気だった。金曜に雨がふり、ここで空気が変わった。土曜は肌寒かった。午後から京都であった「みらいを拓く文化×ビジネス」交流会へ行ったが、着るものを間違えた、寒かったこと寒かったこと。昨日も今日もカラッとして、特に今日は空気が澄んで、よく晴れている。今日は小満、月は上弦。

⇒ 継ぐもの, 繋ぐもの ④ - 言う, 言わない

一昨日の交流会へ一緒に行った人と行きかえりにあれこれ話をした。出てきた話の一つに、気づいても＜言わない＞文化。ここでの話は、よいことわるいことに気づいていても、言わない、動かないという例。＜言わない＞ことが相手のためになることもたくさんある。

「相手のため、みんなのためになると思うことは、言う」。そういう大人たちがいてくれたおかげで、自分では当たり前すぎて気づかないわたし自身を少しずつ知ることができた。

人にとって自分にはないもの。自分にとって、人にはないもの。誰もみな同じように、それぞれのものがある。そう考えると、人も自分もいとしい。そんな感覚になれるから、おもしろい。

でも、いくら先方のため、みんなのためと思っても、相手からはそう思われないリスクはある。そこで大事になってくるのが、同じことを言っても、話し方しだいで受けとめ方が変わる、ということ。

相手のためにあえてものを申すというのは、そもそもその人に関心があるからで、そういう思いが言葉の中に乗るから基本的には相手に伝わるものではないか。

わたしの場合はそれが顕著。だから時には真剣になり過ぎて、語気に力が入りすぎ、表情や目が鋭くなったりする。なぜそれがかわるかという、相手が呆気にとられて、笑みをこぼす、苦笑いすることがあるから。それを見て、はたっと、われにかえる。

それもまた自分の持ち味だと思っているが、昨年読んだ『私の日本語雑記』（中井久夫）で、相手に伝わるか否かは話す時の＜音調＞が要であると紹介してあった。今はそのことは頭の隅に置いている。

「相手のため、みんなのためになると思うことは、言う」。これまで継いできたを、これからも続けていく。そして意識して身近な人々にも呼びかけるよう努める。

みんなのために＜言う＞ことには気後れしても、＜言う＞人がいたら孤軍奮闘にならないよう援護はしましょう、と。それによって、全体の状況が徐々によくなり、なにより一緒にいること、働くこと、動くことが愉しくなるはずだから。

2018年5月29日（火） 曇り

四国ははや梅雨入り、京阪神も秒読み。これから9月にかけて蒸し暑い日が続く。この時期をどう快適に過ごすか。一つのおすすめはストールをカーディガンのように羽織ること。腕まわりがスースーして涼しく、冷房のつよいところでも首・肩が冷えない。ラフすぎず、カタくなく、今年もこれ。

- 継ぐもの、繋ぐもの ⑤ - 自分の番

先日、時流を1845年から辿ってみた。1945年から100年になる2045年には「シンギュラリティー」を迎えると言われている。ではその100年前はどう流れていったのか、見てみようと思った。

こういう風に思うのも、仕事柄というより、もって生まれた資質の方が勝っている。とはいえ、昔からそうわかっていたのではない。わかるようにしてもらったのだ、＜人をみる＞人のおかげで。

『実は僕が推薦させてもらったんです』。ある仕事の依頼をうけて、それも無事に終わろうとしたある日、コーディネーター役の支援機関担当者が居合わせ、挨拶をかわした時に明かしてくれたこと。

なぜわたしだったのか。聞いてみて、少々びっくり。いつかその機関の別の部署に用事で行った時、広いフロアに入ってきた様子を遠目に見ていたというのだった。何か見えるものがあったらしく、印象に残ったそう。

後にまた別の仕事で依頼があった。その際、先方への紹介で「他の専門家の人と違って…」。褒めてもらったのだったが、人との違いをそれほど意識してこなかったのが、火の目を通じて自分を見る感覚。

人をよくみる人がいる。たくさんではないが、確実にいる。そういう人は往々にして、好意的にふるまう、厚意的に＜暗躍＞する。基本的に奉仕精神がある。

わたし自身にも人並みの奉仕精神はあると今では自負している。そのうえ人から＜厚意的暗躍＞をうけて、今に至っている。この縁、恩に恥じないように、これからも努めていく。

他にもいろいろとあるが、人からうけた良きことを、今度は自分を通じて、別な誰かに繋いでいく。そういう人がいるから、世の中まだ守っている。これは恩師の言葉でもある。その精神を繋いでいくとしよう。